

# 古代中国における下級墓葬について(一)

— 土洞墓を中心とする考察 —

## 町田章

はじめに

一、資料

- I 陝西省西安市半坡戦国墓地
- II 河南省洛陽県焼溝戦国墓地
- III 河南省鄭州市崗杜戦国・西漢墓地
- IV 河南省新安県鉄門鎮西漢墓地
- V 河南省禹県白沙鎮西漢墓地
- VI 河南省洛陽県焼溝西漢墓地(以上本号)

二、考察(Ⅰ)

- I 構造について
- II 副葬遺物について
- III 年代について
- 三、考察(Ⅱ)
- I 大・中墓葬との関係
- II 喪葬観

## はじめに

解放後のめざましい考古工作によって、中国考古学は著しい飛躍をとげたのであるが、本稿で取り上げようとする下級墓葬もその成果の一部分である。

いうまでもなく戦国時代は秦漢帝国成立を用意する過渡的性格を具備するのである。考古学上の遺物からもこのことは明確に指摘されている<sup>①</sup>。戦国から秦漢にいたる墳墓と

しては、洛陽金村、長沙楚墓、楽浪漢墓などが以前から著名な遺跡であった。これらの墳墓はその構築、遺品の豪華さよりして衆目を奪ったのであるが、ここではそうした豪華さのない極めて小規模な墳墓が同時代に併存することを重視するのである。

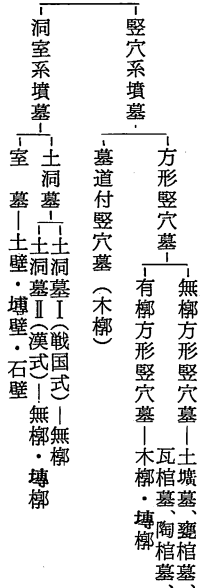
主に黄河中流域に極限して分布する小墓葬群にみられる土洞墓とよばれる形式の墳墓もその一つである。土洞墓とは古代中国における墳墓の形式を豎穴系墓と洞室系墓とに

区分するとき後者の系列に属し、土洞墓・洞室墓・空心埴槨墓などと呼称されている。その詳細な構造については後述するところであるが、もちろん土洞墓が貧弱な墳墓の全てではなく、堅穴系墓も多く存する。しかしながら土洞墓は殷周以来の伝統的な堅穴系墓に対して戦国時代に出現する新しい埋葬方法であり、さらに土洞墓は以後の中国墳墓構築の主流を占める埴室墓・石室墓に発展していく一母体になるのではないかとも考えられるのである。

そうしたことから本稿では戦国より秦漢にかけての土洞墓について若干の検討を行なおうとするものである。

註① 中国科学院考古研究所「新中国の考古收穫」(考古学専刊甲種第六号)六〇ページ。

② 西谷真治「都市国家の崩壊」(世界考古学大系 東アジアⅠ) 何漢南「西安地区工作中的発見」(考古通訊 一九五五—3) では西安附近の漢墓を①大方坑木槨墓、②土洞墓・a 竖井式墓道、b 長斜坡墓道、③埴室墓、④空心埴墓、⑤陶棺墓、⑥竖穴埴室墓と区分しているが、私は戦国から秦漢にいたる墳墓の内部主体を次のように考えてみた。



## 一、資料

土洞墓の説明かたがた土洞墓の存する主要墓地の紹介を報告書によって行うことにしよう。

### Ⅰ 陝西省西安半坡戦国墓地<sup>①</sup>

墓地は西安城の東約1km、白鹿原より下る丘陵(第二台地)に有名な仰韶文化遺跡と隣接、重複して存する。およそ二万m<sup>2</sup>の墓地は北・東・西の三墓群よりなり、ここに一二基の墓が集積している。各地区における墓葬形式なり、分布は次の通りである。

		土洞墓	堅穴墓	計
北	区	四八	五	五三
東	区	九	四	一三
西	区	四四	二	四六
計		一〇一	一一	一一二基

総数一〇一座の土洞墓は土洞(横穴棺室)の切込方によって三式に区分されている。

Ⅰ式は堅墳の底部の長壁と平行して土洞が穿開されているもので、八五基がこの形式に属する(第一図1)。

Ⅱ式は堅墳の一壁に土洞を直角に穿開するもので遺体は堅墳の一壁に対して直角に置かれることになり、一〇基ある(第二図2)。

Ⅲ式はⅡ式と同様に壙壁に対して直角に土洞を穿開するものであるが、この場合特に壙壁の主軸線上に土洞が穿開されているものをいい、二基ある。

いずれの形式にせよ壙壁の平面は長方形を呈しており、多くの場合いわずに二層台の遺存が認められている。壙壁の填土は板築(厚さ約一五cm)が壙穴口部より土台の頂部にいたるまで五・七層にわたってなされ、その板築と板築との間および土洞の土はやわらかい。壙壁は普通三、四×二、二マイナス四m前後を標準としており、とくに標準からかけ離れて大きいものも小さなものもない。壙壁に穿開される土洞はその基底面を長方形とし、Ⅰ式にあつてはその長さを壙壁長辺の約2/3、幅を約1/2とするが、Ⅱ、Ⅲ式ではそれよりもいくらか拡張しているようである。土洞と壙壁の底面におけるレベルをみると、(1)壙壁の底面と同一のもの、(2)一段(約二〇cm)高くなつてゐるもの、(3)一段低くなつてゐるものに区分できる。壙壁と土洞とが接する部分、つまり土洞の入口には板あるいは木枝柵がほどこされ、両者を区画している場合もある(第一図2)。

副葬品は土洞内に設けられている壁龕におさめられる場合が少なくない。壁龕は土洞の一壁あるいは一隅に付設されるのが常だが、ただⅢ式の一墓葬にあつては後代の耳室を想起さすように、土洞入口の左右に各一個を設けている。

遺体の大部分は屈葬で、全墓葬一一二基のうち一〇四基(九三%)を占め、土洞墓に属するものは、その内九五基(全体の八五)、土洞墓の九四%)ある。

副葬品のおもなものは陶器と銅製品であり、それらが認められる墓葬は壙穴墓を合せて六三基(約五六%)あり、これを配置場所によつて区分するとき(1)棺外のみ副葬するもの一六基、(2)棺内のみ副葬するもの三〇基、(3)棺内外ともに副葬するもの一七基となつてゐる。

棺外遺物のほとんどは陶容器であり、その組合せをみると次のようになる。

	陶容器組合せ	墓数
1	俵←壺(鹵形壺)	6基
2	釜+孟	5
3	釜(鹵)	4
4	壺	3
5	罐	3
6	鬲+孟	2
7	釜+壺	2
8	釜+孟+罐	2
9	鬲	1
10	鬲+俵壺	1
11	釜+俵壺	1
12	孟+俵壺	1
13	壺+盒	1
14	鬲+甑+孟+罐	1

右の表から、組合せの基本として三方法があることがわかる。つまり(1)壺などの盛酒器を中心とするもの一四基(1、4、5、12、13)と(2)鬲、釜などの烹熟器を中心とするもの一二基(2、3、6、9)、(3)盛酒器と烹熟器とを混合するもの七基(7、8、10、11、14)がそれである。

こうした陶器組合せによつて年代設定が直接なされるのではない。報告書によるとⅠ式鬲、Ⅰ式鹵(釜のこと)、Ⅰ式孟を出している六六、六七号墓(壙穴墓)を春秋末から戦国早期(戦国時代を早期と晚期とに二分するとき)の時期にあ

てている。<sup>⑨</sup>そしてこれ以外の墓葬を後述の帯鈎と考えあわせて戦国晩期に属するものとしている。土洞墓に副葬される陶器は四川省成都羊子山戦国墓出土遺物<sup>⑩</sup>と類似していることが報告者によって指摘されていたのであるが、秦都咸陽城の発掘によって半坡のそれと極めて類似した陶器が見されている。咸陽城の窑穴より出土した陶器に、咸里郿角<sup>⑪</sup>などの陶文が印されているのであるが、これと同様と思われる、咸里□□、銘が半坡出土の陶罐に印されていることよりして半坡戦国土洞墓の年代を戦国晩期とすることに一層の確実さを加えることとなった。

これらの陶器は極く一部の明器を除いたほかは実用の器物であり、このゆえに墓葬ではない咸陽城窑穴発見の陶器と合致する。実用陶器の副葬は戦国時代晩期における明器の展開とあわせて考えるとき、これらの墓葬が有する社会経済的背景を考えるための、重要な手掛りを用意するであろう。

棺内遺物を有する四七座の墓葬に目を転ずると、そこでは装身具である帯鈎の副葬が顕著であるといえる。この外に鏡、印などが存し、今それらを整理すると次のようになる。

棺内遺物の各種遺物のほとんどは一点副葬であり、五〇号墓の銅帯鈎二、五三号墓の銅鈴四、八三号墓の鉄帯鈎二、一一五号墓の石環二、六〇号墓の石質角柱物二、一〇五号墓の料珠二が二点以上の副葬墓のすべてである。そうしたことから、半坡戦国墓の副葬品が佩玉飾などを含まな

	棺内副葬品組合せ	墓数
一 種 類 副 葬	鉄 帯 鈎	16墓
	銅 帶 鈎	14
	銅 鏡	2
	石 環	2
	銅 杖 頭	1
	鉄 盤	1
	玉 珠	1
	石質角柱物	1
二 種 類 副 葬	銅帯鈎+鉄帯鈎	2
	銅帯鈎+銅印	1
	銅帯鈎+料珠	1
	銅鏡+陶餅	1
三 種 類 副 葬	銅帯鈎+銅印+銅環	1
	銅帯鈎+銅印+銅鏡	1
	鉄帯鈎+銅印+玉飾	1
	銅鈴+銅瑣飾+石壁	1

い極めて質素なものであることがわかる。

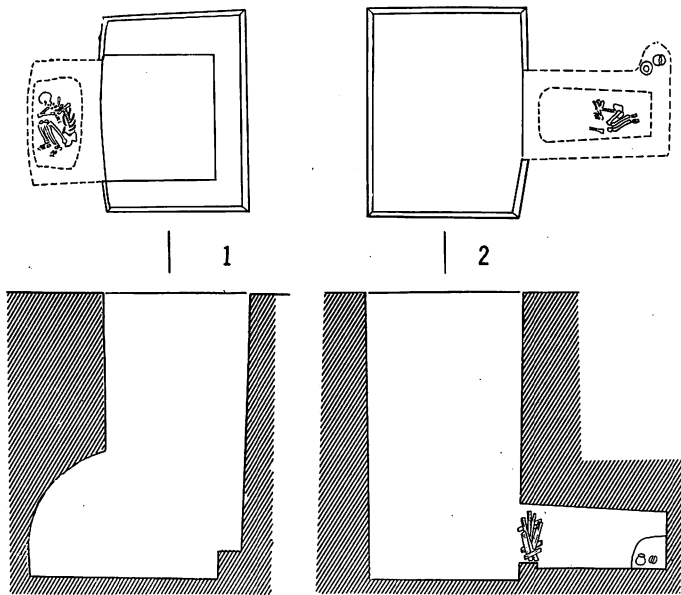
以上が半坡戦国墓地の大体であるが、右のことから、

(1) 半坡戦国墓地の中で古い形態を示す陶器が竪穴墓のみに存し、土洞墓に存しないことよりして、土洞墓の出現を戦国早期(戦国前半)以降に置くことができる。

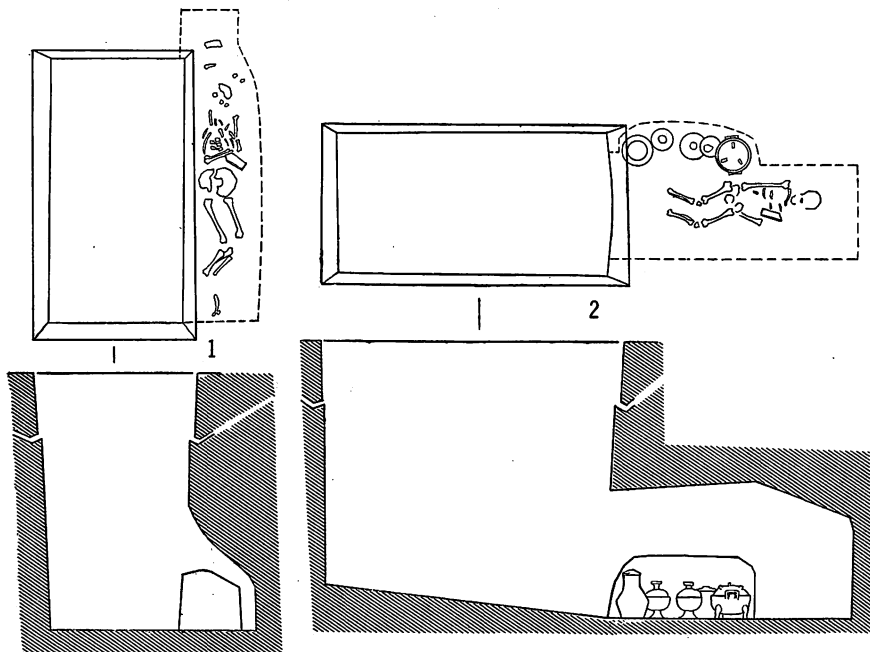
(2) 副葬遺物の面では、実用器物が圧倒していること、帯鈎、印、鏡などの外銅容器、武器などの副葬が全く欠除していること、玉製品の極めて少いことは、この群集墓が銅容器、武器などを副葬する墓葬に比して下級に属することを示している。

(3) とはいえ、有副葬墓は全体の五六%に過ぎず(これを地区別にみると北区：五三%、東区：四六%、西区：六三%となる)、同一構造の墓葬においても、そのおよそ半数の墓にしか副葬品が置かれていないということに注目しなければならぬ。

## II 河南省洛陽県燒溝戦国墓地<sup>⑫</sup>



第一图 西安半坡战国墓 1. I式 (76号墓) 2. II式 (68号墓)



第二图 洛阳烧沟战国墓 1. 650号墓 2. 422号墓

焼溝遺跡は戦国より漢・唐・宋におよぶ墓葬の集積したものである。ここではそのうち五九基の戦国墓をまず取りあげ、漢墓については後述する。

墓地は現在の洛陽城の西北約三華里の地点にあり、隴海鉄路の北側、すなわち北邙山のなだらかな南斜面に形成された数条の深溝によって自然に区画された「焼溝」とよばれる地域に存する。

五九座の戦国墓は隋唐洛陽城の土壁以南において三地区に分かれて発掘されたものであり、地区ごとの墓数は東区―第三号路溝以東、新築校舍以北―二四基、南区―第三号路溝以東、校舍以南―二八基、西区―第三号路溝以西、校舍以北―七基となっている。

土洞墓はこのうち東区：六基、南区：九基、西区一基で計一六基あり、それは全体の二七を占めており、他はすべて堅穴墓である。構造であるが、半坡においてわずかにみられたII、III式系列に属するものが一四基を占め、I式に属するものは二基にすぎない。だが、これは半坡土洞墓の構造と全く一致しているのではなく、細部においてかなりの相違点を指摘しうる。すなわち、ここでは堅壙の底面が土洞に向って傾斜し、しかも堅壙の幅が一段と狭くなっている(第二図②)。土洞の入口には堅壙と区画する木質材の遺存が認められることは半坡と同様であるが、ここではさらに入念さを加え土洞入口の両壁に凹槽(ほぞ)を設け扉もしくは丈夫な仕切板の存在を暗示するものもある。副葬品を納める壁龕は半坡III式土洞墓でわずかにみられた土洞の

側壁に設ける形式がそのほとんど(二座)である。

土洞内には木棺が安置されていたらしく、遺体は屈葬されている。屈葬は多く、堅穴墓を含む四六基の葬法確認の可能なものうち、伸展葬は六基にすぎず他は屈葬である。土洞墓に限れば、一基の伸展葬と一一基の屈葬とが確認される。

副葬品には半坡と同様に銅容器、武器などを欠いているのであるが、その量の面においては半坡遺跡をはるかにしている。このことは各々の墓葬副葬品の数量が増加していることと併せて、有副葬品墓の占める比重が著しく高いことによる。さらに、程度の差こそあれ全ての墓葬における副葬が棺の内外ともにわたっていることは、半坡でみられなかった現象だといえよう。

棺外に副葬される遺物はやはり陶容器であるといえる。陶器の組合せをみると一般的には鼎一個、豆二個、壺一個、小壺一個、碗一個、盆一個、合計七個のセットが基本となるようである。そして各々の墓葬において多少の出入があっても鼎・豆・壺の組合せは動かない。だが、八基の墓葬にあつては豆の代りに盒が置かれており、結局のところ堅穴墓を含む焼溝戦国墓における陶器組合せには鼎十豆十壺と鼎十盒十壺の二系列が存することになる。

このことを一六基の土洞墓にあてはめてみると、(1)鼎十豆十壺の基本組合せを示すもの一一基、(2)碗六個十簋二個のもの一基、(3)破壊され陶器などに攪乱を受けているもの二基、無副葬墓三基となり、鼎十盒十壺の組合せは存しな

い。

陶器のほとんどは明器としての仮器であり、実用品とさ  
れているものは全陶器数三三二個のうち、九個しか数えら  
れていない。このことは半坡とは多少異なる現象であると  
いえる。とくに鼎・豆・壺の陶器が暗文などの利用によつ  
て戦国期の礼器としての銅容器を模倣していること、さら  
に彩絵を施した陶器を出す墓葬の規模が他より大であり、  
遺物内容も豊富であることは注意すべき現象である。

焼溝戦国墓出土陶器にみられるこの現象は洛陽において  
普遍的なものではなく、中州路における陶器編年<sup>⑧</sup>にあつ  
ても

自成一系、独具風格、在這一帶東周墓中少見、但在洛陽  
焼溝墓中則很普遍、

とのべられている。

棺内副葬遺物では、半坡でかなり普遍化していた帯鉤の  
副葬例が少なく、全体五九基中一一基に存しているのみで  
ある。この他に鏡、銅瑣飾の発見があるが極めて限定され  
ており、銅印の出土は皆無である。半坡にみられなかった  
遺物としては石圭と銅鏃がある。石圭の副葬例は多く五九  
基中四三基（土洞墓では一一基）におよんでいる。銅鏃は副  
葬遺物中唯一の武器であるが、わずかに二本発見されてい  
るにすぎなく、そのうち一本は実用品ではなく儀礼用のも  
のと考えられている。

このような様相を呈する墓葬群に対して、報告者は各方  
面から検討を加えた後

那末墓葬的年代亦应在战国晚年、其中一部分的墓甚至可  
能晚到西漢的初年、

とし、戦国後期より秦漢におよぶ墓葬群としているのであ  
るが、墓葬構築の上からみると半坡戦国墓地より後に形成  
された墓地であることは明らかである。焼溝戦国墓地の土  
器は中州路東周墓編年の第六、第七期に合致するものであ  
り、焼溝での鼎+豆+壺の組合せは第六期に、鼎+盒+壺  
の組合せは第七期にあてはまる。だが土洞墓にみられる組  
合せのほとんどは中州路第六期にあてはまり、第七期にお  
ける土洞墓は焼溝において構築されていない。

第七期の土洞墓は、中州路において三基発見されている  
ことを付言しておこう。

### III 河南省鄭州市崗杜戦国・西漢墓地<sup>⑨</sup>

遺跡は鄭州市西北郊外の崗杜を中心とする四百万<sup>m</sup>2の地  
域にあり、四七基の戦国より西漢に至る墓葬が発掘されて  
いる。

四七基の墓葬は三一基の豎穴墓と一六基の土洞墓よりな  
り、土洞墓は更に次の三形式に区分されている

#### 第一式：八基（第三図一）

焼溝のそれとほぼ同様の形式であつて、長方形豎壙の一  
壁に土洞を施設するものであり、土洞の幅より豎壙の幅の  
方がまだ広く、一部の土洞の底面には奥壁に向つて少しく  
傾斜しているものもある。遺体の葬法には伸展葬と屈葬と  
がみられる。龜の付設はなく、副葬品は土洞の入口に排列

されるのが常である。

第二式：五基（第三圖と）

第一式土洞墓の棺材として空心埴を用いるもので、この点を除くと墓室がやや狭くなる程度で他は第一式と同形式である。用いられる空心埴の数は墓葬の各々によって異なるが、一番多く用いられているもので三八枚を数える。

第三式：三基

豎壙の幅が狭くなり、土洞と同じ程度になる。いわゆる狭長土洞墓とよばれているものである。遺体の葬法は伸展葬であり、副葬品は墓室たる土洞の入口に並べられ、龜の付設は認められない。

右の三形式は戦国より西漢におよぶ土洞墓の形式分類であるので、当然副葬品もこれに従って異なってくる。副葬遺物の大半を占める陶器は、同墓地に形成されている豎穴墓に遺存するような整然とした組合せ関係を示していない。陶器以外の遺物は少く銅鏡一面、鉄刀一口、鉄鏃一個、銅勺三個、銅洗一個、鉄鑕二個、不明鉄器二個、五銖錢一六枚がその全てである。

崗杜における副葬遺物は次表の通りであるが、これらの墓葬に対して報告者は次のような年代設定を行っている。

第一式：西漢早期

第二式：西漢後期

第三式：漢代中葉或稍後

しかしながら、これにはいささか問題がある。

第一式土洞墓に副葬されている四個のⅡ式壺と三個のⅠ

	副葬品組合せ	墓数
第一式	Ⅱ式壺	2基
	Ⅱ式壺+Ⅰ式尊	1
	豆+Ⅱ式壺+Ⅱ式罍+銅鏡	1
	Ⅲ式壺+釜+Ⅱ式罍+盆+甌	1
	Ⅲ式壺+Ⅰ式尊+釜+Ⅱ式罍+碗+鉄刀	1
	Ⅰ式尊+Ⅱ式罍+碗	1
	式Ⅱ尊+釜+碗+鉄鏃	1
第二式	Ⅱ式壺+Ⅰ式罍+碗	1
	鼎+Ⅰ式壺+Ⅱ式壺+敦+釜+Ⅳ式罍+碗+甌+銅洗	1
	Ⅱ式壺+Ⅲ式罍	1
	Ⅲ式壺+釜+Ⅱ式罍+碗	1
	Ⅳ式罍+碗+倉+灶+銅勺+鉄器	1
第三式	Ⅳ式罍+倉+灶+鉄鑕+五銖	1
	Ⅳ式罍+倉+灶	1
	倉+灶+鉄器+五銖	1

式尊は、鄭州二里崗<sup>①</sup>でのⅢ式壺および尊と、洛陽中州路<sup>②</sup>におけるⅢ式壺と類似するものであり、一四五号墓に副葬されている豆、Ⅱ式壺、Ⅱ式罍、銅鏡の組合せをとりあげると、豆は戦国以降にみられず、銅鏡は雲文地連弧竜文鏡として戦国期の様相を呈していることから、Ⅱ式壺・Ⅰ式尊、Ⅱ式罍を副葬する墓葬は戦国時代と考えることが可能となる。空心埴を利用する第二式墓にあっても同様なことがいえるのであるが、鼎・敦・壺を基本組合せとする一四三号墓のごときは決して西漢後期に下すことはできない。そうしたことから、第三式をみると、一六一号墓発見の五銖銭が洛陽燒溝漢墓での五銖銭形式分類の第二型<sup>③</sup>に属すると思われること、同じく一六一号墓発見の陶倉が洛陽燒溝漢墓で



は第三期(前期)<sup>⑩</sup>とみなされるところから、西漢後期とすることにほぼ問題はない。

つまり、鄭州崗杜においては、戦国から西漢に至る土洞墓の過渡期性格が示されているのであって、これは後述するところでもあるが、空心埴の土洞墓えの利用という点によって表明される。

#### IV 河南省新安県鉄門鎮西漢墓地<sup>⑪</sup>

遺跡は新安県の西一五kmにあり、その詳細については全く不明であるが、墓地は鳳凰山とよばれる丘陵地帯に営まれている。本稿でとりあげるべき土洞墓は鉄門鎮全墓葬三七基のうち二〇基を占めている鉄門鎮第一期西漢墓である。二〇基のうちには空心埴を利用するもの九基が含まれている。

土洞墓の構造について報告者は「豎穴墓道的一端に、長方形の土洞を開鑿して墓室としている。発掘情況よりみるに、墓室はみな墓道より寛く、二九、三五の二基が雙人葬(合葬)である外、その他はみな単人葬であり、このことから墓室もまたそう広くはない。当時の棺の埋め方をみるることができるが、すべて墓室の前端と墓道の接するところはかなり高く掘っているので、高くて大きな墓門を形成している。墓室の天井は一般に平であることから、平頂」と称している(第四図)とのべている。いうまでもなく墓室とは先に土洞とよんできたもので、墓道とは豎壙とよんできたものである。この墓室の長辺と短辺との割合は二、六五

(二〇基の平均値)となり、一段と細長いものになっている。副葬品を納める龕の設置はみられず、それらは主として墓室の入口に並べられている。棺の有無については明瞭でないが、おそらく本来は木棺のごときものがあつたのではなからうか? 屈葬は全く影をひそめ、その全ては伸展葬となっている。

副葬遺物のうち棺頭に並べられる棺外副葬品は、全て陶器であり、その組合せは、(1)鉄門鎮Ⅱ式罐：Ⅲ式罐を基本とするもの一七基、(2)鼎+敦+壺を基本とするもの一九基、(3)両方にまたがっているもの一二基とに区分できる。

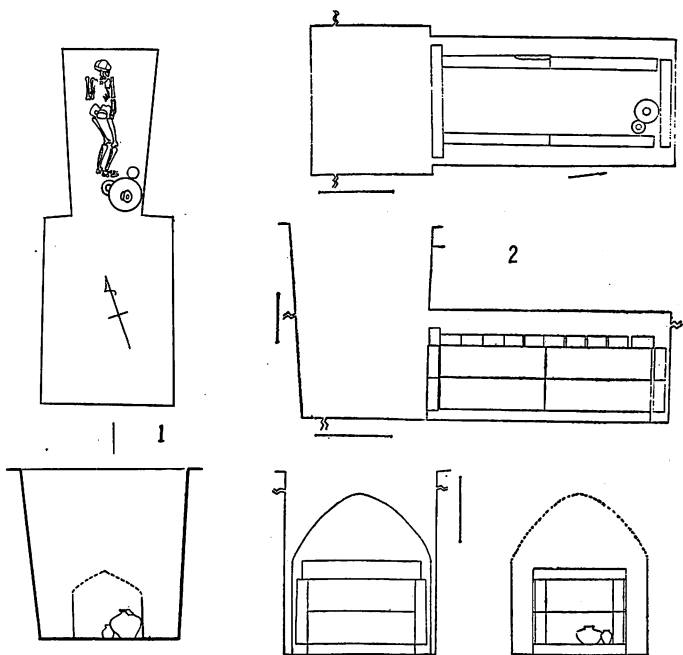
この三通りの組合せの上に方壺、甗、銅錡などが、さらに俑頭、半面銭、五銖銭などが加えられている。

棺内副葬品は豊富でなく、鉄刀を存するもの二基、銅鏡を存するもの二基、銅帶鉤、銅鈴を存するもの各一基、合計六基に棺内副葬がなされているにすぎない。

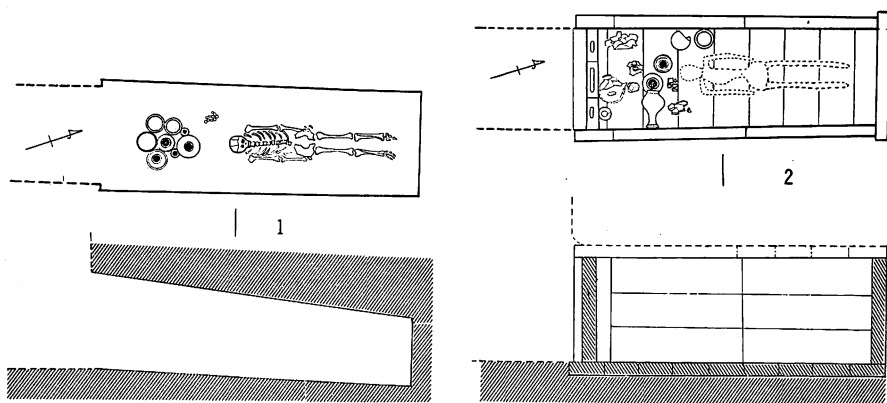
こうした様相を呈する墓葬群について報告者は「この期の墓で常にみられる副葬品には鼎、敦、Ⅰ・Ⅱ式壺、釜、甗および俑頭などがあり、大抵彩絵が施されていることから、それらが戦国晩期の作風を踏襲しているのを知ることができるのであって、器形もまた戦国晩期の進展変化したものである。こうしたことからそれらの年代は西漢初期にあたる。」とのべている。

#### V 河南省禹県白沙鎮西漢墓地<sup>⑫</sup>

遺跡は禹県の西北三〇kmの地点にある潁河を狭む丘陵地



第三图 河南郑州岗杜战国墓 1. 161号 2. 127号墓



第四图 河南新安铁门镇西汉墓 1. 12号墓 2. 14号墓

帯にある。墓地は潁河の西岸に分布する逍遙嶺区、北岸に分布する頰東区、東岸に分布する沙東区よりなり、それぞれ一つのグループを形成している。

総数二六三基のうち土洞墓は逍遙嶺区(96.99基、頰東区(4.11基)にあり、一〇〇基の土洞墓のうち空心埴を使用しているものが六〇基ある。

墓棺の構造は大体鉄門鎮と変らないが、ここでは(1)龕の設けられていない長方形墓室と、(2)龕より発達したと思われる耳室を墓室の入口の脇に付設するものとに区分できるようにである(第五図)。

空心埴の使用は、鉄門鎮よりさらに込みいっており、使用場所に応じて製作された空心埴が効果的に用いられている。また主要部に空心埴を利用しない土洞墓にあっても、要所所に空心埴を用いているものが存する。空心埴などの広汎な利用からしてか墓室の長辺に対する短辺の割合は二、七六となり、鉄門鎮のそれより一層狭長性を増す。

副葬品の状況について詳しくはわからないが、陶器組合せには(1)罎・壺・甕などを一種類あるいは二種類のものと(2)鼎十数+壺を基本にし、その上に杯・釜などを添加するものがある。(1)の組合せを有する墓葬の大半は普通の土洞墓であり、(2)の組合せを有する墓葬には空心埴を利用しているものが多い。棺内遺物は鉄門鎮より豊富であるといえ、鏡、劍、刀、半両銭、五銖銭などがみうけられる。ただ玉器の副葬例はない。

墓葬の年代は大体鉄門鎮と同時期もしくは少し遅れた時

期に比定して大きな誤りはなからう。

## VI 河南省洛陽県焼溝西漢墓地<sup>⑧</sup>

焼溝における西漢土洞墓は上述の戦国土洞墓群とほぼ重なりあって分布している。本稿でとりあげるべき土洞墓は報告者のいう焼溝第一型墓五七基に含まれ、主として第三号路溝にそって集中している。

焼溝での著しい特徴の一つは鉄門鎮、白沙鎮で存した長方形墓室がなく、全て耳室付墓室である。耳室についてであるが、白沙鎮のように空心埴によって仕切られるものは焼溝には存せず、たとえ墓室に空心埴が施設されようとも耳室のみは土壁のままである。このような特徴を有する土洞墓について報告者は次のような形式分類を行っている。

第一型、平頂(空心埴柳墓、土壙墓)

1式(墓室が短い)

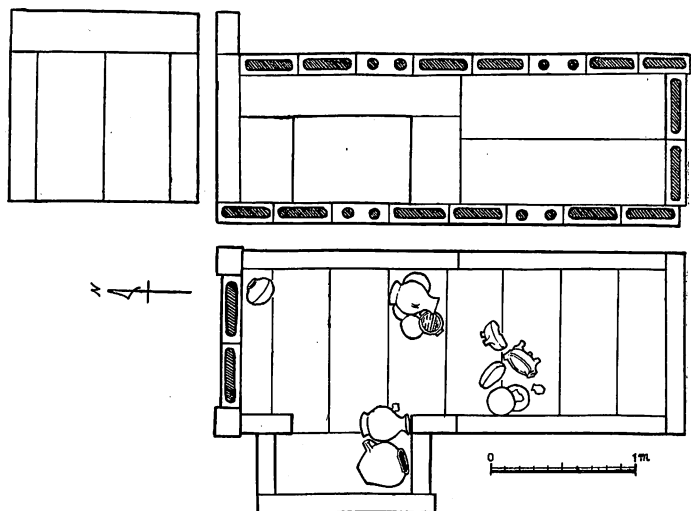
木棺を置いた後、前端がすぐ墓門に接し、棺の前の空隙は少ない。人骨の前端は丁度耳室の入口にあたる(第六図上)。

2式(一室は短く、一室は長い)。

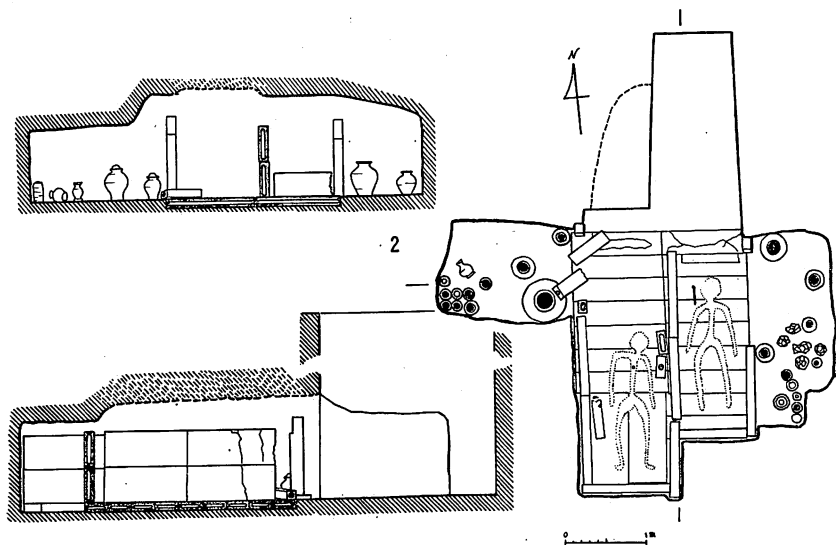
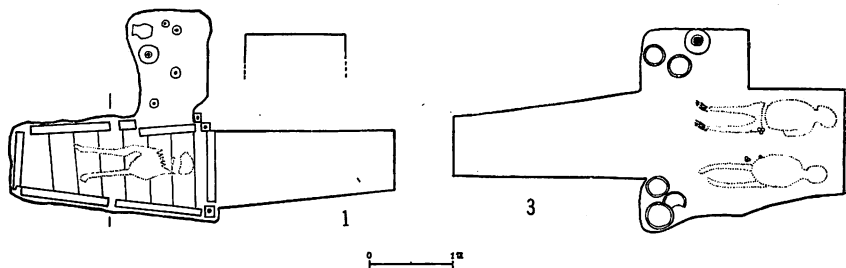
1、3式の合葬で、墓室はすべて二次工作が施されている(第六図下)。

3式(墓室が長い)

木棺を置いた後、前端に一定の空隙をとどめ、人骨の前端は耳室が墓室と交叉するあたりにある(第六図3)。



第五图 河南禹县白沙镇西漢墓 趙31号墓



第六图 洛陽燒溝漢墓 1. 3号墓 2. 312号墓 3. 167号墓

このように焼溝西漢土洞墓の中には二つの相異なる形式と両者を折衷した形式とが存するのであるが、大体においては鉄門鎮、白沙鎮などと同一の傾向を持つものと考えて差しつかえなからう。だが、今一つ重要なことは焼溝における一次合葬、二次合葬の存在である。つまり、焼溝における合葬墓には、(1)合葬を意図して当初より墓葬構築を行っているもの（二次合葬）と(2)元来は単葬墓である墓室に対して追葬のための追加工作を行っているもの（二次合葬）とが存する。これを墓葬の形式によって整理すると次のようになる。

型式	一次合葬墓	二次合葬墓	単葬墓	計
1	一四基	四	二三	四一
2	なし	三	なし	三
3	六基	一	六	一三
計	二〇基	八	二九	五七

副葬品を納めるべき耳室は一般に奥行が広く（〇・五四—三・三六m）、空心埴を用いることがないが、美しく整形されており、戦国墓における壁龕より著しく発達していることを示している。この耳室内に納められる棺外副葬品には陶器、車馬飾具（模型）、銅洗、漆器残片などであった。

陶器の組合せには鉄門鎮、白沙鎮で存したのと同様の二系列があり、それは(1)焼溝Ⅰ—1式罐Ⅰ—1—2式罐を基本

とするものと、(2)この上に鼎、敦、壺、甕、倉などを加えるものとである。

棺内遺物には鏡、帶鈎、刀、劍、半両錢、五銖錢が存し、ほぼ白沙鎮と同様の傾向を示しているといつてよい。

報告者はこうした焼溝漢墓の年代を焼溝第一・二期（西漢中期およびやや後）としている。

註① 金学山「西安半坡的戰国墓葬」（考古学報 一九五七—3）

② 二層台とは戦国墓（特に後半のもの）に存する。本来は豎坑に木槨を組む時、槨壁と墳壁との空隙に填土したものが木槨の消失によって坑の四周に段状に残存したものであるが、木槨組成時の簡略化によって当初から段（つまり台として）を豎坑に造作して槨壁を省き、この上に直ぐ天井を架するものもある。

③ 輝県琉璃閣戦国墓葬甲類の時期。

④ 四川省文物管理委员会「成都羊子山第一七二号墓発掘報告」（考古学報 一九五六—4）

⑤ 陕西省社会科学院考古研究所渭水隊「秦都咸陽故城遗址的調査和試掘」（考古 一九六二—6）で報告者は「綜觀窖穴遗址和陶器文字、我們估計、咸里可能是当時私人作坊聚集之所、而“鄭”姓作坊則是較大者。……此外、西安半坡戰国墓中出土帶有“咸里□□”字樣的陶罐、可能也是這里制作的。

⑥ 王仲殊「洛陽燒溝附近的戰国墓葬」（考古学報 一九五四—8）

⑦ 全墓葬五九基のうち副葬品の全く存しないものは、わずかに三基（内一基は被盜墓）であり、内二基は土洞墓である。

⑧ 中国科学院考古研究所「洛陽中州路」（考古学專刊、丁種第

四号)

⑨ 同上 六三ページ。

⑩ 河南省文化局文物工作队第一隊「鄭州崗杜附近古墓發掘簡報」  
(文物參攷資料 一九五五—10)

⑪ 河南省文化局文物工作队「鄭州二里崗」(考古學專刊丁種第七号) 図參捌—6・1。

⑫ 前掲「洛陽中州路」七五ページ、図五〇—3。

⑬ 河南省博物館「湖南出土銅鏡図録」六八ページの銅鏡に類似しており、これが発見された55長陳M2号墓は土坑墓で鼎、豆、壺、盒の陶器組合せを持っていることから戦国晩期の様相を呈している。

⑭ 洛陽区考古發掘隊「洛陽燒溝漢墓」(考古學專刊 丁種第六号) 二二三ページ。

⑮ 同上 一一四ページ表一六ならびに図一〇一。

鄭州崗杜墓群編年の混乱は「那未從戰國初年、到漢代中葉的鄭州崗杜一帶、在墓葬的形制上有：從豎穴土坑—豎穴空心磚—寬大豎穴墓道土洞空心磚墓室—狹長土洞墓的發展過程」(前掲「鄭州崗杜附近古墓發掘簡報」二三ページ)と併存を考えずに直線的に考えるところにあると思われる。

⑯ 河南省文化局文物工作队「河南新安鉄門鎮發掘報告」(考古學報 一九五九—3)

⑰ 河南省文化局文物工作队「河南禹県白沙漢墓發掘報告」(考古學報 一九五九—1)

⑱ 任意の墓群三五基の平均値。

⑲ 前掲「洛陽燒溝漢墓」

### 史泉バックナンバー定価表

3号	70円
4号	80円
5号	100円
6号	100円
7.8号	200円
9号	100円
10号	100円
11号	100円
12号	100円
13号	100円
14号	100円
15号	100円
16.17号	200円
18号	100円
19号	100円
20.21号	200円
22号	150円
23.24号	250円
25号	200円

送料 合併号 30円  
普通号 20円